

国展の作家たち～昭和を彩った青森の美術家～

青森県の昭和は、棟方志功や関野準一郎をはじめとする個性的な才能に彩られています。彼らの多くが活動の足がかりとしたのが、「国画会」とその公募展「国展」でした。

国画会は、大正7年(1918)に誕生した「国画創作協会」を前身とします。「新しい創造」を求めた土田麦僊ら、京都の若手日本画家たちが立ち上げた団体で、大正14年には洋画部門を第二部として新設し、梅原龍三郎らを会員として迎え本格的に活動を始めます。

しかし、伝統的な会派や派閥、表現方法による評価から離れ、「自由な創造」を命題とした国画創作協会は、その「自由」ゆえに日本画部の崩壊を招き、昭和3年(1928)に解散。同時に、第二部会員が中心となって「国画会」が発足しました。国画会は、戦前戦後を通し、洋画・工芸・彫刻・版画・写真(昭和14年設立)の5部門を擁する有力な在野団体の一つとして、精力的な活動を続けます。

本県からは、棟方志功や松木満史、松木の勧めを受けて出品し会員となった小館善四郎をはじめ、関野準一郎、そして国展三羽ガラスとも呼ばれた渡辺貞一、石ヶ森恒蔵、名久井由蔵など多くの作家たちが、国展を発表の場として活躍しました。

本展では、昭和を中心に活躍したこれら作家たちの国展出品作を中心に約100点を展示し、彼らの画業を紹介します。



左から 名久井由蔵、松木満史、渡辺貞一、小館善四郎
(写真提供：佐藤幸四郎氏)

【出品作家と主な作品】

版画	棟方志功	「大和し美し」「釈迦十大弟子」
	下澤木鉢郎	「下北の女」「東奥館冬窓」
	関野準一郎	「東寺白雨」「恋猫」「紅型」
洋画	松木満史	「タンDEM」「ラリュージュ」
	小館善四郎	「梟(ふくろう)」「れもん」
	渡辺貞一	「極光Ⅲ(モヨロ記)」「ユーカラ」
	石ヶ森恒蔵	「地蔵の庭」「仏頭の説話」
	名久井由蔵	「夜の静物」「かれい」

《参考出品》

工芸	浜田庄司	「柿釉抜絵角瓶」
	河井寛次郎	「竹図皿」
	芹沢銈介	「どんきほうて 全十二図」



渡辺貞一 《ストーン・サークル》



名久井由蔵 《部屋の魚》

期 間

平成22年7月17日(土)～8月22日(日)

* 休館日: 7月20日、26日、8月9日、16日

開館時間

午前9時～午後5時 (受付は閉館の30分前まで)